ŒUVRES COMPLÈTES

モーパッサン
全集
1

ŒUVRES COMPLÈTES

春陽堂

モーパッサン全集／1

1965年12月15日初版発行

ŒUVRES COMPLÈTES

モーパッサン全集 1

第一巻

訳者代表　新庄嘉章

発行者　和田欣之介
発行所　春陽堂書店
東京都中央区日本橋通3の8

印刷　中野印刷　　製本　若林製本

落丁・乱丁本の場合はお取りかえいたします

モーパッサン全集　第一巻目次

翻訳者

青柳　瑞穂

木村庄三郎

桜井　成夫

新庄　嘉章

鈴木　力衛

田辺貞之助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長編小説

女の一生……七
ベラミ……一六七
モントリオル……三八五
ピエールとジャン……五六六
死のごとく強し……六六三

紀行文

太陽の下へ……八一一
水の上……八九五
放浪生活……九五八

長編小説

女の一生

Une vie

（ささやかなる真実）

ブレンヌ夫人にささぐ
忠実なる友の敬意をこめ、あわせて、
亡友の思い出のために
ギイ・ド・モーパッサン

1

荷造りを終えると、ジャンヌは窓べに寄った。だが、雨はまだやんでいなかった。

大雨は、夜通し、窓ガラスと屋根にものすごい音をたてて降っていた。低くたれこめて水けをいっぱいに含んだ空が、まるで裂けでもして、地面にすっかり水をあけ、土を牛乳がゆのようにどろどろにし、砂糖のように溶かすのではないかと思われた。突風が重苦しい熱気を含んでときどき吹きすぎていった。あふれたみぞの水音が人通りのない往来を満たしていた。往来に沿った家々は、海綿のように湿気を吸いこみ、その湿気は家の中にまでしみこんで、穴倉から屋根裏にいたるまで、壁にすっかり汗をかかせていた。

ジャンヌはきのう修道院の寄宿舎を出たばかりで、ようやくこれで永久に自由解放の身となり、あんなにも長い間夢みていた人生のあらゆる幸福をまさに捕えようとしているのであった。そうした彼女であるだけに、もしも天気がよくならねば、父が出発をちゅうちょするのではないかということが心配でならなかった。そこで、朝からもう百度も、地平線のほうをうかがってみるのだった。

それから暦を旅行カバンの中に入れるのを忘れていたのに気がついた。そこで、壁の上の小さな厚紙を取りはずした。この暦は月によってしきられていて、図案模様のまんなかに、一八一九年と、ことしの年号が金文字でしるされていた。それから、彼女は鉛筆で最初の四段を消した。それは聖者の名まえを一つ一つ消していくのだが、そうやって五月二日まで来た。これが修道院を出た日である。

とびらの向こうで、一つの声が呼んだ。

「ジャネット！」

ジャンヌは答えた。

「おはいりくださいな、おとうさま」

そこで、父親が姿を現わした。

シモン・ジャック・ル・ペルチュイ・デ・ヴォー男爵は、変わり者でお人よしの、前世紀の貴族であった。ジャン・ジャック・ルソーの熱心な崇拝者で、自然に対して、つまり野や森や禽獣（きんじゅう）に対して、恋人のような愛情をいだいていた。

生まれが貴族であるだけに、本能的に九十三年を憎んではいた。だが、気質は哲学者的であり、受けた教育によって自由人であったので、専制政治を憎んでいた。もっともその憎み方は、毒にも薬にもならない、口先ばかりのものではあったが。

この人の大きな力でもあり、大きな弱点でもあるのは、その善良さであった。愛撫（あいぶ）したり、恵みあたえたり、抱擁したりするのに腕の数が足りないという善良さであり、造物主的な善良さであった。散漫で、抵抗力のない、意志の神経が一本まひしているようなもの、精力のどこかがぽっかり穴をあけているようなもので、いわばほとんど一種の悪徳であった。

理論家の男爵は、娘を幸福な、善良な、すなおな、そしてやさしい女に育てたいと思って、教育の計画をすっかりたてていた。

娘は十二の年まで家に置かれたが、それからは、母親は泣いてそれをいやがったけれども、聖心修道院の寄宿舎に預けられた。

男爵は娘を厳重に修道院に閉じこめておいた。人からも知られず、また浮き世のことも知らさずにおいたのである。十七になったら、純潔なままの娘を返してもらいたいと男爵は望んでいたのだった。そうしたら、自分の手で、娘を一種の、正しい詩の浴槽(よくそう)で湯あみさせようというのだった。そして、野を歩きまわり、豊穣(ほうじょう)な大地のふところで、そぼくな恋の姿、動物のむじゃきな愛情、生命の明朗な法則などを見せて、娘の魂を開いてやり、無知のしびれをほごしてやろうと思ったのだった。

彼女は今修道院から出てきたのである。喜びに顔を輝かせ、みずみずしい生気と幸福への欲求とに満ち、所在ない昼、長い夜、希望ばかりが胸に去来する孤独のおりおりに、彼女の心が幾度かすでに思い描いたあのすべての喜び、あの楽しい偶然を、すぐにも手に取らんばかりにして。

彼女は、ヴェロネーゼの描いた肖像にそっくりだった。はだにも同じつやを与えたかと思われるようなつややかなブロンドの髪の毛。そのはだは、太陽の愛撫を受けるとほのかに見える、青白いビロードのような軽いうぶ毛でぼかされた、かすかにバラ色がかった貴族娘のはだであった。目は青かった。陶製のオランダ人形の目が持つあの不透明な青さだった。

左の小鼻に小さなほくろが一つあった。もう一つ右側に、これはあごの上にあった。そこには、ほとんど見分けがつかないくらい皮膚の色とよく似た二、三本の毛がちぢれていた。背は高く、胸は成熟し、胴の線は波打っていた。はっきりした声は、ときにあまりにも鋭く響くと思われることもあった。だが、そのむじゃきな笑い声は、周囲に喜びをまきちらしていた。しばしば、それが癖なのだが、髪でもなでつけるかのように、両手をこめかみに持っていった。

彼女は父親のそばに駆け寄って、ぎゅっと抱きしめながらせっぷんした。

「では行くの?」と、彼女はきいた。

父は微笑して、かなり長くのばした、すでに白い髪を横に振った。そして窓のほうを指さした。

「こんな天気に、どうして出かけられるんだね?」

だが、娘はやさしく甘えながら、せがんだ。

「ねえ、おとうさま、出かけましょうよ。ねえ、お願いだから。昼すぎには天気になってよ」

「だが、おかあさんがなかなか承知しまいて」

「承知なさるわよ。請け合うわ。わたし、交渉役引き受けるわ」

「おかあさんを説き伏せることさえできたら、わしのほうは問題なしだよ」

そこで、彼女は男爵夫人の居間のほうへ駆けだした。彼女はきょうの旅立ちを、居ても立ってもいられぬ気持ちで待ちこがれていたのである。

聖心修道院にはいって以来、彼女はルーアンを離れたことがなかった。父親は自分が決めた年齢に達しないうちは、いかなる物見遊山(ゆさん)も許さないのだった。ただ二度ばかり、二週間ほどパリに連れていかれたことがあった。でも、それは都会だった。彼女は田園しか夢みていなかった。

ところが、今、レ・プーブルの彼らの所有地で、一夏を過ごそうとしているのだった。それは、イポールの近所の断崖(だんがい)の上に建てられた祖先伝来の古風な屋敷だった。彼女は海べの自由な生活に、かぎりない喜びを期待していた。それに、この邸宅は彼女に譲られたものであって、結婚したあかつきには、ずっとそこで住まうことになっていた。

だから、昨夜来休みなしに降り続いている

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

雨は、彼女の生涯の最初の大きな悲しみだった。

だが、三分もたつと、彼女は母親のへやから駆けだしてきた。そして、家じゅうに響くような声で叫んだ。

「おとうさま、おとうさま！　おかあさまがいいって。馬をつけさせてちょうだい」

豪雨はいっこうに勢いがにぶらなかった。それどころか、四輪馬車が玄関の前に来たときには、いっそう激しくなったのではないかとさえ思われた。

ジャンヌは馬車に乗ろうとしていた。そこへ、男爵夫人が、一方は夫に、一方はまるで若者のように整った体格の、力の強い、背の高い小間使いにささえられながら、階段を降りてきた。この小間使いは、コー地方の生まれのきっすいのノルマンディ娘で、せいぜい十八にしかなっていなかったけれど、少なくとも二十（はたち）には見えた。男爵家ではいくらか娘分の扱いを受けていた。というのは、ジャンヌの乳きょうだいだったからである。名まえはロザリといった。

ところで、この娘のおもな役目は、女主人の歩行を助けることであった。男爵夫人は数年来心臓肥大症のためにすっかり太ってしまい、たえず心臓の痛みを訴えていた。

男爵夫人は、息をハーハーはずませながら、古びた屋敷の玄関前の石段のところまでたどりつくと、雨水が小川のように流れている庭をながめて、つぶやいた。

「まったく、正気のさたじゃありませんね」

夫は、あいかわらず微笑を浮かべながら、答えた。

「でも、あんたがいいといったんだよ、アデライド夫人」

夫人は、アデライドというはなやかな名まえを持っていたので、夫は、いくぶんからかいぎみの、一種の敬意を表して、いつも『夫人』ということばをつけるのだった。

それから、夫人はふたたび歩きだし、やっとのことで馬車に乗りこんだ。すると、とたんに馬車のバネが全部曲がった。男爵は夫人の横にすわり、ジャンヌとロザリはうしろ向きの座席に場所を取った。

炊事女のリュディヴィヌが、がいとうをいくつか丸めて持ってきたので、人々はそれをひざの上に広げた。次にかごを二つ持ってきたので、これは足の下に隠した。それが済むと、彼女は御者台によじのぼって、シモンじいさんの横にすわった。そして、大きな毛布を頭からすっぽりかぶった。門番夫妻が門をしめかたがた見送りに出てきた。そして、あとから荷車で行くはずの荷物について、最後の注意を受けた。さて、そこで馬車は出発した。

御者のシモンじいさんは、雨の中で背中を丸くし、頭を低く下げて、三枚えりのがいとうの中にからだを隠していた。うなるような突風が窓ガラスを打ち、道路を水でひたした。

馬車は二頭の馬が疾走するにまかせて、全速力で川岸のほうへ降りていった。そして、大型の船のならんだそばを走っていった。帆柱や帆げたや綱具は、雨の降りしきる空に、裸木のように物悲しげに立っていた。やがて、モン・リブーデの長い大通りにさしかかった。

まもなく、馬車はいくつかの牧場を横切った。ときおり、雨にぬれそぼった柳が、死体のようにぐったり枝をたれて、霧のような雨のしぶきを通して、ぼんやり浮かんでいた。馬の蹄鉄（ていてつ）はパチャパチャ音をたて、四つの輪はどろの輪となった。

皆は押し黙っていた。心までも、地面と同じように湿った感じだった。母親はうしろによりかかって、頭をもたせかけ、まぶたを閉じた。男爵はゆううつな目で、ぬれそぼった単調な野づらを見やっていた。ロザリはひざの上に包みを一つ載せて、庶民階級特有のあの動物的な夢想で物思いにふけっていた。だ

が、ジャンヌは、このなま暖かい大雨の下で、これまで閉じこめられていた植物が外の大気にあてられたように、いきいきとよみがえってきたように感じていた。密度の濃い喜びが、ちょうど木の葉の茂みのように、彼女の心を悲しみから守っていた。彼女はしゃべりはしなかったけれども、何か歌いたくてたまらなかった。外に手を出して、手のひらにたまる水を飲んでみたかった。そして、疾走する馬に運ばれることが、荒涼たる風景をながめることが、こうした豪雨のさいちゅうにも安全に身を守られていると感ずることが、うれしくてならなかった。

激しい雨の中で、二頭の馬のつやつやとぬれて光ったしりから、湯気がたちのぼっていた。

男爵夫人はだんだん眠りに落ちていった。ぶらりとたれさがった六本の、きちょうめんに巻いた腸詰め型の巻き髪で縁どられた顔は、首のまわりの三つにくびれた太い波形のたるみ――このたるみの最後の波は、胸の大海の中に消えていた――で力なくささえられていたが、少しずつさがっていた。息を吸うたびに持ち上がる顔は、すぐにまたガクリと落ちた。ほおがふくらんでは、半分開いたくちびるから音のいいいびきが漏れてきた。夫が妻のほうにかがみこんで、でっぷり太った腹の上に組んだ両手の上に、皮の小さな紙入れをそっと載せた。

この感触で夫人は目をさました。そして、眠りを中断されたときのあのもうろうとした意識で、この品物をぼんやり見つめた。紙入れが落ちた。そして、口が開いた。金貨や紙幣が馬車の中一面にちらばった。夫人は今度は完全に目をさました。娘のうきうきした気持ちは、笑いの花火となって爆発した。

男爵は金を拾い集めた。そして、夫人のひざの上に載せて言った。

「いいかい、これがエルトの農場から残った全部だよ。レ・プープルを修繕させるんで売ったんだが、レ・プープルはこれからしょっちゅう住むことになるんだからね」

夫人は六千四百フランを数えて、静かにポケットへ収めた。

両親は男爵夫妻に三十一の農場をのこしてくれたが、一つ売り、二つ売りして、これが九番めに売った農場だった。それでもなお、年に二万フランもあがる土地を持っていた。それは、うまく管理さえすれば、一年に三万フランは楽々はいってくるはずだった。

男爵夫妻は簡素な暮らしをしていたのだから、もしも家の中に常に口を開いている底なしの穴、つまり善良さという穴さえなかったならば、これでじゅうぶん足りたはずだった。善良さは、太陽が沼池の水けをからしてしまうように、彼らの手の金をからしてしまった。金は流れ、逃げ、姿を消していった。どういうふうにしてだろう？　それはだれも知らなかった。いつも、夫妻のどちらかが、こんなことをいうのだった。「どうしてこんなんだろう。何もたいしたものは買わないのに、きょうは百フランもつかってしまった」

ところでまた、こういうふうにむぞうさに金を使うことは、彼らの生活の大きな幸福の一つであった。そして、この点については、実にみごとな、人の心を動かすようなやり方で、互いに理解し合っていた。

ジャンヌがきいた。

「わたしのお屋敷って、今もきれい？」

男爵は愉快そうに答えた。

「いまにわかるよ、嬢や」

それでも、少しずつ雨の猛威がしずまってきた。やがて、それはもはや一種の霧のようなもの、舞い狂う細かなぬか雨にしかすぎなくなった。雲の天井が高くなり、しらんできたように思えた。と、突然、今まで見えなかった一つの穴から、太陽の長い光線が斜めに、さっと牧場の上にさしてきた。

雲が裂けて、大空の青い地が現われてきた。やがて、この裂けめは、ちょうどとばりが引き裂かれたように大きくなった。そして、くっきりあざやかな、深い紺碧（こんぺき）をたたえた澄んだ空が、下界の上に大きく広がってきた。

さわやかなやさしいそよ風が、大地の幸福な吐息のように吹き過ぎていった。そして、庭か森に沿って馬車を進めていると、ときに、羽をかわかしている小鳥のせわしないさえずりが聞こえてきた。

夕暮れが迫ってきた。今は、馬車の中では、ジャンヌを除いて、皆が眠っていた。馬に一息つかせ、カラスムギを少しと水を与えるために、二度ばかり宿屋の前で止まった。

太陽はすでに沈んでいた。遠くで鐘が鳴っていた。とある小さな村で、角灯にひを入れた。空にも降るような星が飾灯をともした。ともしびのついた家が、火の一点となってやみを貫きながら、ところどころに現われた。と、突然、丘の背後から、モミの枝を通して、大きな赤い月が、眠そうな顔をポッと出した。

暖かいので、窓ガラスはおろしたままになっていた。ジャンヌは、夢想に疲れ、幸福な幻に飽きて、今は休息していた。同じ姿勢を長く続けていたので、からだがしびれ、ときどきそれで目がさめた。すると、彼女は外をながめるのだが、明るい夜の中を農家の木立ちが通り過ぎたり、野づらのあちこちに寝そべった雌牛の首をもたげたりするのが目にはいった。それから、新しい姿勢を取って、さっき見かけた夢をふたたび捕えようと試みた。だが、車輪の絶え間ないきしりが耳について、頭が疲れた。そこで、ふたたび目をつぶったが、心身ともぐったり疲れているのが感じられた。

そのうち、馬車が止まった。下男や下女たちが、手に手にあかりを持って、馬車の昇降口の前に立っていた。到着したのである。いきなり目をさまさせられたジャンヌは、大急ぎで飛び降りた。父親とロザリは、ひとりの小作人に足もとを照らしてもらいながら、男爵夫人をほとんど運ぶようにして連れていった。男爵夫人はすっかり疲れきって、苦痛を訴えながら、絶え入りそうな小さな声で、たえず、「やれやれ！　おまえさんたち！」と繰り返していた。夫人は何も飲みたくもなければ、食べたくもないといって、寝床に横になるなり、すぐにぐっすり眠ってしまった。

ジャンヌと男爵は差し向かいで夜食を食べた。

親子は顔を見合わせてにっこりほほえんだり、食卓越しに手を握り合ったりした。そして、ふたりとも子どもらしい喜びに捕えられて、修繕のできた邸内検分と出かけた。

それはノルマンディ特有の、農園とも邸宅とも見える、あの軒の高い広壮な家だった。灰色に変わった白い石でできていて、一族の者を入れうるほど広かった。

広い廊下が家を二等分して、端から端へ通っており、前後両方の正面に大きなとびらが開いていた。左右二つの階段が、この入り口をまたぐようなかっこうになっていた。まんなかに空洞（くうどう）をつくって、二階でその二つの上り口が出会い、ちょうど橋のようになっていた。

一階には、右手にとてつもなく大きな客間があり、ここには小鳥の遊んでいる木の葉の茂みを描いた壁掛けが張りめぐらされてあった。細目針のししゅうで張られた家具は全部、そっくりそのままラ・フォンテーヌの『寓話（ぐうわ）』のさし絵だった。キツネとコウノトリの話が描かれている、子どものころ好きだったイスをふたたび見いだしたとき、ジャンヌはぞっと身震いするほどのうれしさをおぼえた。

客間のかたわらには、古い本のぎっしり詰まった図書室と、ほかにもう二つの、今は使われていないへやがあった。左側には、新し

く板を張り替えた食堂、下着類置き場、配膳室(はいぜんしつ)、炊事場、それに浴槽（よくそう）のある小さなへやがあった。

一本の廊下が、二階全体を縦に切っていた。十のへやの十のとびらが、この廊下に向かって並んでいた。右側のいちばん奥は、ジャンヌのへやだった。ふたりはそこにはいっていった。男爵は、使わずに屋根裏にしまってあった壁掛けと家具とを使っただけだが、最近新しくこのへやを模様変えしたのだった。

オランダできの、非常に古い壁掛けが、異様な人物でこの場所を満たしていた。

だが、寝台を見つけたとき、少女は喜びの叫びをあげた。四すみにカシワの木で彫った、まっくろなろう光りのする四羽の大きな鳥が、寝台をささえ、まるで寝床の番人とでもいったふうだった。寝台の両側には、花とくだものの大きな花飾りが刻まれていた。優雅な丸みそが彫られ、コリント式の柱頭のある四本の柱が、バラの花とキューピッドのからまったじゃばらをささえていた。

寝台は記念建築物かなにかのように立っていた。それでも実に優雅な趣を持っていた。木はだは長い年月で浅黒く光って、きびしい感じだったが。

足掛けぶとんと寝台の天蓋（てんがい）は、二つの空のようにきらめいていた。これらは、金糸で縫った大きなユリの花がところどころに星をちりばめたように輝いている、濃紺の古代絹で作られていた。

寝台の美しさをじゅうぶんにたんのうすると、ジャンヌはあかりを高くかかげて、壁掛けをしらべ、意匠の主題を理解しようとした。

緑と赤と黄の、世にも異様な服をまとった若い領主と若い貴婦人とが、白いくだものの実った青い木の下で何やら語り合っていた。木の実と同じ色の大きなウサギが、灰色の草を少しかじっていた。

人物のちょうど真上に、これが遠景というところなのだが、屋根のとがった、丸い小さな家が五つ見えていた。そして、その上のほとんどもう空に、まっかな風車が立っていた。

花をつけた大きな枝葉模様が、これら全体の構図の間をはいまわっていた。

次の二つの壁掛けも、まえのと非常によく似ていた。ただ違うところは、オランダふうの衣装をつけた四人の小人の老人が家々から出て、極度の驚きと怒りを示しているように、腕を空に向かって差し伸べているのが見られることだった。

だが、最後の壁掛けは、一場の悲劇を現わしていた。あいかわらず草をかじっているウサギのそばに、若い男が死んだのであろう、倒れている。若い貴婦人がそれを見て、われとわが胸に剣を刺している。そして、木の実の色は黒くなっていた。

ジャンヌは絵の意味を考えるのをあきらめかけていた。と、その時、片すみに実に小さな動物が一匹いるのを見つけた。もしもウサギがほんとの生き物だったら、草の葉っぱのようにわけなくたべてしまいそうな動物だった。それでも、これはライオンのつもりなのだった。

そこで彼女は、これがピラムとチスベの不幸を描いたものだということがわかった。彼女は図案意匠の単純さにおもわず微笑したけれども、こうした恋の冒険の図に取り巻かれていることを幸福に感じた。これは、たえず自分の胸になつかしい希望を語ってくれるであろう。そして、毎晩、自分の眠りのうえに、この伝説に残る古代の愛情をさまよわせてくれることであろう。

その他の家具は、このうえもなくばらばらな様式を集めていた。それはおのおのの時代が家に残した家具であって、これは、古い家を、あらゆるものが雑居している一種の博物館とするものだった。びかびかした銅の金具でおおわれたすばらしいルイ十四世式のたん

すは、今なお当時の花模様の絹をかぶせられたルイ十五世式の二つのひじ掛けイスの間にはさまれていた。花梨木（かりぼく）の机が、丸いガラスぶたの中に帝政時代の置きどけいが入れてある暖炉だなと向かい合っていた。

このとけいは、金色の花が咲いている花園の上に四本の大理石の柱でつりさげられている青銅製のミツバチの巣をかたどっていた。その細長い裂けめから出たきゃしゃな振り子が、この花園の上に、七宝の羽を持った小さなミツバチを、右に左にと永久にさまよわせていた。

文字板は彩色された陶製で、ミツバチの巣の横腹にはめこんであった。

とけいが十一時を打ちはじめた。男爵は娘にせっぷんして、自分のへやに引き揚げた。

そこで、ジャンヌは、心があとに残る思いがしたが、寝床にはいった。

もう一度最後に、へやをぐるりと見まわした。そして、ろうそくを消した。だが、寝台は頭のほうだけが壁にくっついていて、左手に一つの窓があった。そして、そこから月の光が潮のように流れこみ、床の上に光の水たまりを広げていた。

月光の反射が壁にはねかえっていた。その青白い反射は、ピラムとチスベの動かぬ恋の姿を、弱々しく愛撫していた。

足もとの別の窓から、やわらかな光を全身に浴びた一本の大きな木の姿が、ジャンヌの目に見えた。彼女は寝返りをうって目を閉じた。だが、しばらくするとまたあけた。

まだ馬車の動揺にゆられているような気がし、車輪の音があいかわらず頭の中で響いていた。彼女ははじめはじっと動かずにいた。こうして静かにしておれば、しまいには眠れるだろうと思って。だが、心のいらだたしさが、まもなく全身にひろがった。

足がひきつり、熱がだんだん高まってきた。そこで、彼女は起き上がった。そして、足も腕も裸のまま、彼女を幽霊のように見せる長い膚着一枚で、床板の上に広がった光の沼を横切り、窓をあけて外をながめた。

夜はじつに明るかったので、まるで真昼のようによく見えた。少女は幼年時代に愛したここらあたりの風景全体に見覚えがあった。

まず正面に広い芝ふがあったが、これは夜の光の下でバターのように黄色く見えた。二本の大きな木が、屋敷の前にそびえ立っていた。北のはスズカケで、南のはボダイジュだった。

この広い芝ふのずっと先に、小さな森の茂みがあって、これがこの屋敷の境になっていた。この屋敷は、五列にならんだ年へたニレで、沖より吹きつける突風から守られているのだが、このニレの老木は年じゅう激しく吹きまくる海風のために、ねじれ、枝をそがれ、かまれ、屋根のような傾斜に刈りこまれていた。

この一種の園は、左右をとてつもなく背の高いプープリエ（ポプラ）――ノルマンディではこれをプープルと呼んでいた――の長い並み木道でくぎられていた。この並み木道が、主人たちの住まいと、それに隣接した二つの農園を隔てていた。農園の一つにはクイヤール一家が住み、もう一つのにはマルタン一家が住んでいた。

このプープルが屋敷にその名をあたえていたのだった。この囲繞地（いじょうち）に向かうには、ハリエニシダがまばらにはえている未墾の広い野原が広がっていて、その上を夜昼休みなく潮風が音をたてて吹き渡っていた。その先は、いきなり海岸で、高さ百メートルばかりのまっしろな、切りたった断崖（だんがい）となり、そのすそを波にひたしていた。

ジャンヌは、遠く、星の下に眠っているように見える波が、どこまでももくめ模様の表面をつくっているのを見ていた。

太陽のないこの静けさの中で、大地のあら

ゆる芳香が発散していた。下の窓のまわりにはいのぼっているジャスミンは、鼻をつくような吐息をたえず吐き、芽ぐんだばかりの若葉の、もっとほのかなにおいと混じり合っていた。ときどき、海からのゆるやかな風が吹き過ぎて、塩けを含んだ空気とねばねばした海草の、あの強烈なにおいを運んできた。

少女ははじめは空気を吸いこむ幸福に身をうち任せていた。すると、いなかの静かな安らぎが、あたかも水浴のように気持ちをしずめてくれた。

夕べが来ると目をさまし、そのかすかな生存を夜の静けさの中に隠しているあらゆる動物が、黙々としたうごめきで薄明の夜を満たしていた。鳴き声をたてぬ大きな鳥が幾羽か、黒い斑点（はんてん）のように、影のように空を飛んでいった。目に見えぬこん虫の羽音が耳をかすめた。声もたてずに走りまわるけはいが、露をいっぱいに含んだ草の間や、人けのない道の砂の上を横切っていた。

ただ、幾匹かのゆううつなガマが、短い単調な調べを月に向かって歌っていた。

ジャンヌには、自分の胸が、こよいのこの月の明るい晩のように、多くのささやきに満たされてふくらんでくるように思われた。そのざわめきで自分を取りかこんでいる、これら夜の生き物にも似た無数のとりとめのない欲望が、突然胸の中にうごめきだしたように思われた。ある親和力が彼女をこの生きた詩に結びつけた。そして、夜のやわらかなほの白さの中で、超人間的な戦慄（せんりつ）が走り、捕えることのできない希望が、なにか幸福の吐息とでもいったものが、ときめき動くのを感じた。

そして、少女は恋を夢みはじめた。

恋！　それは二年このかた、それが近づいてくるという刻々つのる不安で彼女を満たしていたものだった。いまや、彼女は自由に愛することができるのだった。出会いさえすればいいのだ。そのかたに！

どんな人かしら？　彼女にもはっきりわからなかった。また、考えてみたことさえなかった。そのかたはそのかたなのだ。それだけのことだった。

ただ、自分がその人を心から愛し、その人も力の限り自分をかわいがってくれるであろう、ということだけは知っていた。ふたりはこよいのような夜、星空から降る光の灰を浴びながら散歩するであろう。手に手を取って、互いにぴったり寄り添い、心臓の鼓動を聞き・ながら、肩の暖かみを感じながら、ふたりの愛を夏の夜のここちよく澄んだ空気の中に溶かしこみながら、愛情の力だけでやすやすと胸の奥の奥の思いにまで忍びこめるほど結びつけられて、ふたりは散歩を続けるであろう。

そして、これは、清純な不滅の愛情の中で、無限に続くのである。

すると、突然、その人が、自分のすぐ目の前にいるような気がした。と、いきなり、ばくとした肉感の戦慄が足の先から頭のてっぺんにまで走った。彼女は自分の夢を抱きしめようとするかのように、無意識のしぐさで両腕を胸にぴったり押しあてた。そして、見知らぬ人のほうに差し出されたくちびるの上を、あたかも春の吐息が彼女に愛のせっぷんを与えでもしたかのように、なにものかが通りすぎて、彼女はほとんど失神しかけた。

突然、はるかかなたの、屋敷のうしろの道の上に、夜の中を歩く人の足音が聞こえた。すると彼女は、気違いじみた魂の衝動にかられ、不可能なことや、天佑的（てんゆうてき）な偶然や、神の助けによる予感や、運命の小説的な配合などを信ずるあの無我夢中の気持ちになって、こんなことを考えた。「もしもあのかただったら？」と。彼女は不安に胸をときめかせながら、道行く人の調子正しい足音に耳を傾けた。きっと門のさくの前に立ち止まって、一夜の宿を求めるにちがいない、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com